

隣人と共に

奨励	崔 忠植 [ちえ・ちゆんしく]
奨励者紹介	希望の家カトリック保育園園長 在日大韓基督教教会牧師

互いに愛し合うことのほかに、だれに対しても借りがなくてはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」、そのほかどんな掟があっても、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されます。愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです。

(ローマの信徒への手紙 13章8—10節)

光復節への思いから

皆さん、アンニョンハシムニカ、こんにちは。同志社大学の学長であり総長であった、そして理事長を歴任された松山義則先生がお亡くなりになられたと新聞で知りました。90歳でした。同志社女子大学の栄光館で追悼礼拝があると新聞報道にありました。謹んで哀悼の意を表したいと思います。理事長であられた時、同志社大学の中には同志社校友会コアクラブがありまして、私もそのメンバーですが、ハリス理化学館の横に尹東柱（ユンドンジュ）の詩碑があります。鄭芝溶（チョンジョン）詩碑と二つ並んでいますが、尹東柱詩碑を建立する時、松山先生にはずいぶんご努力していただきまして、1995年に無事に詩碑を建立することができたという意味でも、私たちにとって忘れることができない先生でもあります。

今、全国各地で「日本を取り戻す」という大きなポスターが貼られているのをご存じだろうと思います。安倍首相の大きな写真が貼ってあって、「日本を取り戻す」と大きくタイトルが書かれているわけです。私はそれを見るたびに、どんな日本を取り戻そうとしているのか、といつも思うんですね。集団的自衛権の問題とか、特定秘密保護法の問題とか、憲法改悪の恐れ等々のことを考えると、戦争のできる日本を取り戻そうとするのか、かつての日本の悪夢の再来となるのか、積極的に日本の平和主義を唱えながら、それとは裏腹にそのような意図が含まれているのではないかと、私はどうしても考えざるを得ません。それが証拠に、A級戦犯が合祀されている靖国神社に、安倍首相をはじめ閣僚の人たちが堂々と手を振って参拝している姿を見ると、それが当たり前のような風潮に流されてしまっている今の実情をどうしても凝視せざるを得ず、疑問を感じずにはいられません。アジア、特に、韓国や中国との歴史認識の差異を克服することなく突き進んでいこうとしている憂いがあるなど、私は非常に心配しているところです。

来年、戦後70になります。「終戦70年」と言う人もいます、「敗戦70年」と言う人もいますけれども、私たちが在日韓国人・朝鮮人にとっては8月15日を解放記念日と呼んでいます。正式の祝祭の名前はクワンボクチョルといいます。光が再びやってくるという意味で「光復節」と呼んでいます。この国に光が、かつての栄えた韓国が再びやってくるように、という願いで呼んでいます。おそらく日本も同じ思いをもっているのではないだろうかと思いますが、もう決して、韓国は東アジアの平和を追求して侵略したり、されたりする国にはならないという決意を、来年にはあちこちで表明するのではないかと思うのです。しかし、先ほどのような疑問が残るだけに、解放の記念日になるのか、それとも、光復の記念日になるのかという思いをもちながら、私は今、立っています。

しかし、在日の人たちがそのような思いをもちながら日本の中で生きていく上で、意見を述べる権利がないのです。権利を獲得していくためには、地方参政権が最低限必要ではないでしょうか。100年、日本に生きて暮らしていかうとも、市長を選ぶ、市議員を選ぶ、府議員を選ぶことさえできない状況であるだけに、私たちが具体的に市政や府政や国政に参与することのできないもどかしさを、いつも、いつも感じているところです。どうしても死ぬまでに投票してみたいと、韓国籍を離脱して日本国籍に帰化をし、参政権を取得して投票するという執念をもっておられる方もたくさんおられます。知人の医者もそのような思いで先日帰化をされて、投票しに行くんだとおっしゃっておられました。

そのような状況の中で一体、日本はどこへ行くかとしているのかという思いでいっぱいです。軍事費から考えればアメリカは突出していますが、日本の軍力はもう世界第3位まで躍り出たと言われてます。靖国神社参拝については、アメリカも疑問を呈しているという報道でご存じだろうと思います。靖国への参拝は、日本の軍国主義の最悪の伝統を容認した、ということではないでしょうか。日本の戦争犯罪によって犠牲になった世界中の人々に対する、あるいは子孫に対する侮辱ではないかと、アメリカのニューヨーク・タイムズは報じています。親日派の多くの人々も、参拝に対しては異議を申し立てておられることが報道されています。

私は京都で生まれて京都で育ちました。いわゆる在日二世です。孫がいますので四世の世代まで京都に住んでいるわけですが、私の父親は90年前に日本にやってきました。日本で勉強したいと願い、大阪を経由して京都にやってきましたが、勉強したいと願いながらも、生活することができないということで、60年間、工場の工員としてずっと働いて私たちを育ててくれたのです。これも、日本が朝鮮を植民地支配したことが大きな原因であります。朝鮮を略奪する。すべてのものを奪い尽くす現状があり、言葉や名前や文化や命や王様や米も、あらゆるものを奪い尽くしたことが意味されているのだと思います。そのような布石をつくったのは一体誰なんだ。大きな布石の一因になったのが、有名な慶應義塾大学をたてた福沢諭吉ではないかと思っています。彼は『学問のすゝめ』で「人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と、すばらしい文言を発表しました。私たちは小学校、中学校で学問の神様として学びました。しかし、彼がずっと後に出した『脱亜論』があります。福沢諭吉の本はいっぱい書店にあります。その本はありません。ほとんど触れられていない。それはなぜか。「隣の国、中国や朝鮮、そんな国は挨拶するに及ばない。そんな国は侵略してもいい国だ」と断言したんです。アジアの侵略を容易にするには大きな、大きな布石があったからではないかと、私は本当に残念で、残念でなりません。その発表後、彼自身は韓国人を保護したり、面倒をみたりした流れは伝え聞いています。

それ以前に、京都には豊臣秀吉の豊国神社があります。三十三間堂の前にある大きな神社ですが、そのすぐ前に耳塚という塚があります。それは、日本の住民が大事に整理してきたもので、京都市からも保存しようという運動が起こり、今、きれいに保存されています。京阪電車の七条駅の近くにあり。文禄・慶長の役が1500年代後半にありました。豊臣秀吉が、朝鮮人の耳を戦利品としてもぎ取ってきて塩漬けにし、京都に持って帰るといふむごい事件です。その時に韓国の全羅道（チョロド）や（私の故郷でもある）南原（ナモン）というところは有名な場所ですが、そこには鼻塚と書かれておりました。5万人の住民のうちの1万人の鼻がそこに埋められているということで、今は大きな公園になって記念の塚ができています。

学生の間、どのような立場で学が姿勢をもつかはとても大事なことではないかと思っています。自分はこの立場に立って人の人生を考えるか。相手の人生を考えていく上で、強い文化に流されていこうとするのか、徹底的に虐げられた人々のためにその人の立場に立って考えていこうとするのか。それは人権を考える上でとても大切で基本的なことではないかと思えます。

あの忌まわしい戦争を是認し、これを支持したことを懺悔するということが1960年代に日本のキリスト教団の中でなされました。もちろん、同志社大学もその中に入っていたので私はホッとしているわけですが、キリスト教団が再び過ちを繰り返さないという思いであったと思います。

ヘイトスピーチに抗して

今日、新聞紙上でも出ていますが、京都だけではなく、大阪や東京、日本のあちこちで「ヘイトスピーチ」というデモが行われています。つい2週間前も宇治で行われました。私は飛んできました。住民側になって見ていたんですが、彼らが言うことは、「朝鮮人になぜ日本の税金を使わせるのか」「蛆虫、朝鮮人を叩き出せ、殺せ」「そんな朝鮮人に日本の税金を使っているのか」。とんでもありません。私も含めて、どれだけ多くの朝鮮人が税金を払っていると思いますか。こんなことがあっても、ヘイトスピーチについて国で問題として採り上げることがまずないのか。どうしてそれがもち上がらないのか。ようやく最近、有志の人たちがこれを乗り越えて、ヘイトスピーチに反対していこうと考え、行動するグループが出てきました。その主張には「社会に差別・暴力・憎悪を蔓延させたら、平等や平和、諸民族の友好はあり得ない、それは民主主義を破壊することだ」と書いてあります。日本は、国連の人種差別撤廃条約を世界の先進国の中で一番遅くに批准した国です。人種差別撤廃条約を批准した日本政府にとっては、危機感をもってヘイトスピーチに対処しなければならぬ責任があるのではないだろうかと思えます。今の状況は、本場に残念で残念でなりません。身震いがします。

私は二世ですが、私の家内は大学時代に以前の大学で知り合った日本人で、反対を押し切って結婚しました。50年前では、そういう反対があつた当たり前のことだったと思います。私の長男は韓国人と結婚しました。その当時、日本人女性と結婚しても子どもは全部、韓国籍でした。次男は日本の女性と結婚し、三男も日本人と結婚しました。長男だけが韓国人と結婚したというわけです。今の時代はダブルの子どもは全部、日本国籍になります。1985年に国籍法が変わって、20歳になれば自分の国籍を選択できる。そのような状況に変わってきています。6年前に京都新聞にある記事が大きく出ていました。びっくりして切り抜いたんですが、「親が外国人、30人に1人」。びっくりしませんか。「結婚相手は外国人、15組に1組」。ある面では、いい定着なのかなと思います。10年前までは京都に110万の外国人が住んでいました。去年の統計では134万に増えています。4万1000人の外国人が住んでいます。京都には今たくさん外国人が来ています。観光施策もあるかもしれませんが、そのような状況が現実私たちに周辺に起こっていることから考えれば、当然の変化かもしれません。地域の中で生きている者同士が手を差し伸べ合って生きていくことは当たり前のことになってきていて、外国人との結婚は普通のことだという感覚で、これから生きなければならない時代にきているのかな。同志社大学にも留学生がたくさん来ているのは知っています。保育園の卒園児が韓国で勉強して帰ってきて、同志社大学で先生をしているというニュースも知りました。たくさん留学生が外国から来て学んでいること、外国人が身の回りにいっぱいいることを知っていただければと思います。

ですが一方で、それを悪用する人たちもたくさんいるんですね。安い給料で労働力を確保し、時にはお金を払いたくない、出入国管理事務所に密告して追放させるという悪徳業者も、あちこちで問題になっています。大阪である事件が起き、先輩の先生と一緒に、十三へ抗議に行きました。そんなことが当たり前になっていることも心配でなりません。

共に生きる喜び

今日、聖書を読みましたが、この箇所の中に簡単な言葉が記されています。「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」とあります。「殺すな、盗むな、むさぼるな。あなた方はそれを超えてともに生きる。隣人を愛しなさい。ともに生きることを徹底しなさい」と語っているのではないかと思います。

ノーベル平和賞を受賞された、昨年12月に亡くなられた南アフリカの元大統領ネルソン・マンデラ氏。彼は人種隔離政策を撤廃しようとした人です。彼が描き、夢みた国づくりは「虹の国をつくること」だったそうです。偶然かどうか分かりませんが、私の保育園の送迎バスのデザインは虹なんです。虹のデザインをした車が保育園の近辺を走っています。虹はとてもきれいですね。その七色の虹の、色と色の間には滲みがある。滲みは必ず生ずる。それは何か。滲み、色、滲み、色、ダブルの子どもたちが滲みではないかなと。その滲みを含んだ色と色との接合によって、すばらしいきれいな虹ができる。世界の民族が集まる、きれいな虹ができる。その美しさは本当に言葉では言い表しようがなく、いろいろな思いがそこにあるのではないかな、と思うのです。マンデラ大統領のことを聞いて、彼が虹の国をつくろうとしていたことを知らなかったんですが、へえ、そうだったのかと、それを聞いて感動したものであります。

マーティン・ルーサー・キング牧師は生涯を通して差別反対の方針をずっと訴え続けました。結局、銃弾で亡くなるわけですが、彼が望んだことは「私には夢がある、今はどんなに差別があろうとも、抑圧があろうとも、虐殺があろうとも、私には夢がある。私には夢がある。白い子どもと黒い子どもが手を取り合って抱き合って一緒に踊って楽しむ。そんな喜びの日が必ずくる。そんな夢をもち続けて生きようじゃないか」と言いました。私たちの同志社の広場は、そのような愛で満ちあふれた、希望に満ちあふれたマダン（庭）であってほしいと願って、話を終えたいと思います。

2014年5月7日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録